

大学図書館におけるラーニング commons及び飲食可能空間の整 備実態と配置特性

DEVELOPED CONDITION AND SPATIAL CHARACTERISTICS BETWEEN LEARNING COMMONS AND “EATING AND DRINKING SPACES” IN UNIVERSITY LIBRARIES

木下遼香 — * 1 岡松道雄 — * 2
宋 俊煥 — * 3

Haruka KINOSHITA — * 1 Michio OKAMATSU — * 2
Junhwan SONG — * 3

キーワード：
能動的学習, インフォーマル空間, カフェ, ラウンジ

Keywords:
Active learning, Informal space, Cafe, Lounge

In recent years, learning commons spaces have become prevalent in university libraries throughout Japan. The purpose of this study is to clarify the characteristics and operational status of learning commons by focusing on spaces where students can eat and drink, which are thought to contribute to their active learning. The study targets 125 university libraries across Japan, and clarified that students use the spaces in different ways depending on their spatial characteristics, as well as operational issues. It suggests the possibilities and challenges of effective use for active learning.

1. はじめに

1.1 研究の背景と目的

近年、日本の初等中等教育から高校教育までの指導方針が受動的学習から能動的学習へと変化している¹⁾。グローバル化や少子化などの大学を取り巻く環境における急速な変化に伴い、中央教育審議会では学士課程教育について、学生が主体的に課題を発見し、解を見いだしていく能動的な学習として「アクティブラーニング」へ展開の必要性が謳われた²⁾。「ラーニングcommons(以下、LC)」は、この「アクティブラーニング」を促進する学習環境を言い、日本各地の大学図書館に導入されつつある。

アメリカ発祥のインフォメーションcommons³⁾から発展したLCは、話し合いながら学習可能な空間やプレゼンテーションできる空間、カフェのような飲食可能空間まで、多様な空間への展開が見られている。高島⁴⁾は、ドイツの大学図書館について、「学びの一部」としてカフェが積極的に設置されていると報告している一方、濱田⁵⁾は、アメリカの大学には、フォーマルとインフォーマル、プライベートな空間を用意していることに対し、日本の大学ではフォーマルな空間だけであることを指摘しており、未だ国が求める大学教育のための環境が整っているとは言いにくい状況にある。

そこで本研究では、日本全国の大学図書館におけるLCの整備実態を整理すると共に、その中でインフォーマルな空間として飲食可能空間に着目し、その整備特性及び運用実態、LCとの配置関係を明らかにすることを目的とする。最後に大学図書館の飲食可能空間が、能動的学習のために有効な用途となる可能性と課題を提示する。

1.2 既往研究と本研究の位置づけ

大学図書館のLCに関する研究は多数存在する。中井ら⁶⁾⁷⁾は、利用者の視点から、LC等におけるアンケート調査や巡回プロット

調査等により、個人及びグループの利用実態を明らかにしている。また、LCやアクティブラーニングの浸透により、議論しながら勉強できる場や、友人との交流を目的に飲食できる場としての図書館を求める利用者が増えていることを指摘している。本研究は、大学図書館内の飲食可能空間に着目し、その導入傾向を整理する共にLCの中の諸機能の導入特性を明らかにする基礎的な調査である。

また、込山ら⁸⁾は秋田県立大学を対象にLCの利用実態を調べており、利用者のアンケート調査では、図書館の欠点として「飲食ができない」ことが最も多い結果となっている。このように飲食可能空間への要求が高まっている中、全国の大学図書館における飲食可能空間の導入経緯と目的、運営する上での課題(利点・欠点)を網羅的に整理することは、時期に適したと判断した。

夏目ら⁹⁾は、国公立大学を対象にLCの現状を網羅的に調べているが、本調査では、国公立大学だけではなく私立大学も取り入れた点、LCの構成要素の中で飲食可能空間に着目した点が異なる。河本ら¹⁰⁾は、大学図書館内の飲食可否について網羅的調査を実施しているが、調査時期が2015年前後であり、大学図書館内に飲食可能空間の設置が増加した2016年以降の動向については扱っていない。

1.3 研究の方法

本研究では日本の大学図書館のLCと飲食可能空間を調査対象とする。飲食可能空間は、提供されて飲食する①カフェと、持ち込んで飲食する②ラウンジに分けて分析を行う。研究対象の選定においては、THE世界の大学ランキング日本語版¹¹⁾に掲載された大学(2020年)における図書館の合計290館(国立:70館、公立:41館、私立:179館)に対して、アンケート調査を実施し、有効な回答が得られた125館を最終的に調査対象とした。

アンケート調査項目は大きく3つに分けられる(表1)。①LCの整

本稿は、2020年度日本建築学会中国支部研究報告集にて発表した内容を修正・加筆したものである¹²⁾。

*1 ㈱一条工務店

*2 山口大学大学院創成科学研究科 教授・博士(工学)

*3 山口大学大学院創成科学研究科 准教授・博士(環境学)
(〒755-8611 山口県宇部市常盤台2-16-1)

*1 Design Division, ICHJO Co., Ltd.

*2 Prof., Graduate School of Sciences & Technology for Innovation, Yamaguchi Univ., Ph.D.

*3 Assoc. Prof., Graduate School of Sciences & Technology for Innovation, Yamaguchi Univ., Ph.D.

備特性と構成要素では、LC の導入時期と経緯、導入目的、設置形態、配置計画、面積の現状を把握すると共に、飲食可能空間の導入傾向と位置づけを明らかにするために構成要素別の導入時期と導入数を調査した。②飲食可能空間の運用実態(ソフト面)では、その導入時期、導入経緯、導入目的と共に、実際の利用実態と課題、カフェを有する場合は、事業者の決定及び運営方法を調査した。③飲食

表1 アンケート調査概要

調査項目	①ラーニングcommons (LC)の整備特性と構成要素				
	導入時期、導入経緯、導入目的、設置形態、配置計画、面積 構成要素別(共同学習・PC群・展示スペース等)の導入時期と導入数				
	②飲食可能空間の運用実態(ソフト面)				
	導入時期、導入経緯、導入目的、実際の利用実態と課題 カフェを有する場合、事業者の決定及び運営方法				
調査対象施設	国立大学70校、公立大学41校、私立大学179校				
	2020年10月中旬～11月上旬				
調査方法	各大学に電子メールまたは郵送によりアンケートを送付し、図書館職員の方に回答をもらい集計を行う				
送信数(館)	290	回答数(館)	125	回答率(%)	43.1

表2 大学種別のラーニングcommonsの導入館数

大学種別	調査数(館)	導入館(館)	導入率(%)
国立大学	33	31	93.9
公立大学	28	18	64.3
私立大学	64	43	67.2
全体	125	92	73.6

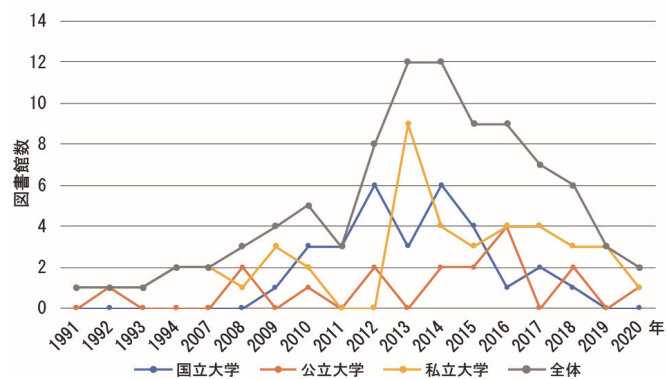


図1 大学種別のラーニングcommonsの整備時期

可能空間の整備特性(ハード面)では、飲食可能空間の設置形態や配置計画、面積等を調査し、LCとの配置関係から見た類型化を行い、類型別の学生の利用方法の特徴を整理した。尚、125館のうち全ての調査項目に回答していない場合は、各項目の回答数を母数に集計し考察を行った。

2. 日本の大学図書館におけるラーニングcommonsの現状

2.1 ラーニングcommonsの整備状況

アンケート調査で得られた大学図書館のうち、大学図書館にLCを導入している大学図書館は、125館中92館(73.6%)であった。大学種別の内訳は国立が33館中31館、公立が28館中18館、私立が64館中43館という結果となり、国立は9割以上、公立と私立は6割以上でLCが導入されていることがわかる(表2)。

大学種別の整備時期をみると、公立と私立は1990年代から導入し始めていることに対し、国立は2008年からとなっており、全体的には2012年から2014年にかけて多く広まったことが分かる。この時期は、文部科学省の教育中央審議会により日本の教育方針を学生主体の能動的学修へ転換した時期である(図1)²⁾。

2.2 ラーニングcommonsの面積と設置形態

大学図書館のうち、LCの面積割合と設置形態に関しては、全て回答を得られた67館を基に分析を行う。まず、LCは図書館全体延べ床面積の15%以内で設置されている大学が、70.1%を占めている。大学種別では国立の場合、LCの面積割合は5~20%が多い一方、公立と私立は10%以内に集中していることが読み取れる(表3)。また、LC面積割合の20%以上は、全体の23.9%と少ないが、比較的私立の方が多く占めていることが分かる。

LCの設置形態に関しては、「改修」が最も多く、次に「改築・新築」、「模様替え」の順となっている。LCの面積割合が5%以内と規模の少ない大学図書館では、「模様替え」を多く採用している一方、15%以内では、「改築・新築」をやや多く採用している。「改修」はLCの面積割合に割と関係なく採用されている。特に15%以上の比較的大きい規模のLCでは、他の設置形態と比べ「改修」の割合が増えていることがわかる。

2.3 ラーニングcommonsの面積と配置型

大学図書館に整備されたLCの配置を、LCを一つの階に集めてい

表3 ラーニング・commonsの面積と設置及び配置形態

LC割合	国立大学		公立大学		私立大学		改修		改築・新築		模様替え		その他		配置型				全体							
	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合	数	割合						
0~5%	4	16.7%	6	66.7%	12	35.3%	4	19.0%	8	42.1%	8	61.5%	2	14.3%	12	41.4%	5	18.5%	0	0.0%	3	75.0%	2	50.0%	22	32.8%
5~10%	6	25.0%	1	11.1%	7	20.6%	4	19.0%	3	15.8%	2	15.4%	5	35.7%	4	13.8%	8	29.6%	1	33.3%	0	0.0%	1	25.0%	14	20.9%
10~15%	7	29.2%	1	11.1%	3	8.8%	3	14.3%	5	26.3%	1	7.7%	2	14.3%	7	24.1%	3	11.1%	1	33.3%	0	0.0%	0	0.0%	11	16.4%
15~20%	3	12.5%	0	0.0%	1	2.9%	2	9.5%	1	5.3%	0	0.0%	1	7.1%	2	6.9%	1	3.7%	1	33.3%	0	0.0%	0	0.0%	4	6.0%
20~25%	1	4.2%	0	0.0%	4	11.8%	4	19.0%	0	0.0%	1	7.7%	0	0.0%	1	3.4%	3	11.1%	0	0.0%	1	25.0%	0	0.0%	5	7.5%
25~30%	2	8.3%	1	11.1%	3	8.8%	2	9.5%	2	10.5%	0	0.0%	2	14.3%	2	6.9%	3	11.1%	0	0.0%	0	0.0%	1	25.0%	6	9.0%
30~35%	0	0.0%	0	0.0%	2	5.9%	0	0.0%	0	0.0%	1	7.7%	1	7.1%	0	0.0%	2	7.4%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	2	3.0%
35~40%	1	4.2%	0	0.0%	0	0.0%	1	4.8%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	3.7%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	1.5%
40~45%	0	0.0%	0	0.0%	1	2.9%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	7.1%	1	3.4%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	1.5%
50~75%	0	0.0%	0	0.0%	1	2.9%	1	4.8%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	3.7%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	1.5%
合計	24	100.0%	9	100.0%	34	100.0%	21	100.0%	19	100.0%	13	100.0%	14	100.0%	29	100.0%	27	100.0%	3	100.0%	4	100.0%	4	100.0%	67	100.0%

る「ワンフロア型」、各階に LC を分散している「分散型」、LC を数階に集めた「別棟型」、共同学習空間など、1 室のみを整備している「一部分型」の 4 つに分類することができた(表 3)。67 館のうち、「ワンフロア型」(29 館、43.3%)と「分散型」(27 館、40.3%)が多く占めている。LC の面積との関係を見ると、5%以内ではワンフロア型(12

館、41.4%)と一部分型(3 館、75.0%)が多い一方、15%以上に増えていくと分散型が多くなるのがわかる。

2.4 ラーニング commons の構成要素と導入時期

LC を導入している 92 館における 10 つの構成要素に分類し、その導入率を図 2 で示す³⁾。最も多かったのはグループ学習空間であり、国立・公立・私立の全てが約 9 割以上導入されている。次に多かったのは共同学習空間であり、学生同士で会話をしながら学習できる空間を多く設置しているのがわかる。次にプレゼンテーションと PC 空間のように専用機器の使用を目的にする空間が多く整備されている。10 構成要素のうち 5 番目に多いカフェ・ラウンジは、飲食可能空間であり、全体の約 6 割が整備を実施している。また、国立の方が、公立・私立と比べ導入率がやや高いことがわかる。

大学図書館において LC の各構成要素の導入時期別整理したものを図 3 で示す。グループ学習空間や共同学習空間など、導入率の高い空間は、LC 全体の導入が多かった 2011 年から 2014 年にかけてピークに達し、PC 空間は 2016 年をピークに導入されたことがわかる。一方で、イベント空間や展示空間、カフェ・ラウンジは 2016 年から増加しており、近年多く導入されている傾向にあることがわかる。さらにカフェ・ラウンジは、その導入数の増加が続いており、2020 年度にカフェ・ラウンジの導入図書館数は 11 館と他の構成要素の導入数と比べ約 2 倍以上多いことが読み取れる。

3. 飲食可能空間を有する大学図書館の整備及び運用の特徴

3.1 飲食可能空間の整備状況と設置時期

2 章により、飲食可能空間が近年増加していることを踏まえ、3 章では、飲食可能空間(カフェ・ラウンジ)⁴⁾に焦点を置き、整備状況等を整理する。まず、飲食可能空間を設置している大学図書館は、125 館中 59 館(47.2%)と約半数が設置していることがわかる。大学種別では、国立が 33 館中 22 館(66.7%)、公立が 28 館中 10 館(35.7%)、私立が 64 館中 27 館(42.2%)である(表 4)。

次にカフェとラウンジを分けてまとめると、カフェは、国立が 9 館(27.3%)、公立が 1 館(3.6%)、私立が 4 館(6.3%)であり、全体 125 館中 14 館(11.2%)と設置図書館がやや少なく特に国立より公立と私

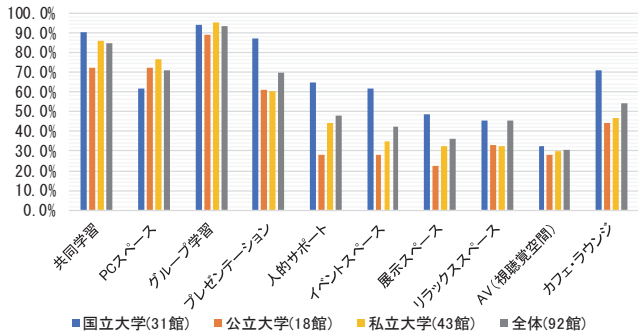


図 2 ラーニング commons の構成要素の導入率

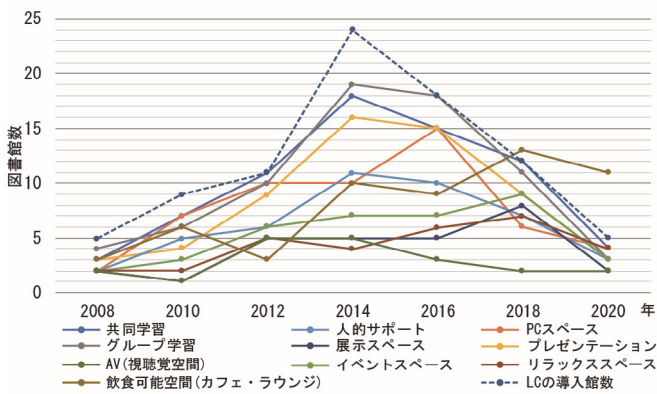


図 3 ラーニング commons の構成要素の導入時期

表 4 大学種別の飲食可能空間(カフェ及びラウンジ)の設置数

大学種別 (n=125館)	国立大学		公立大学		私立大学		全体	
	館数(A)	A/E(%)	館数(B)	B/E(%)	館数(C)	C/E(%)	館数(D)	D/E(%)
飲食可能空間の設置	22	66.7%	10	35.7%	27	42.2%	59	47.2%
カフェ設置	9	27.3%	1	3.6%	4	6.3%	14	11.2%
ラウンジ設置	18	54.5%	10	35.7%	26	40.6%	54	43.2%
飲食可能空間の未設置	11	33.3%	18	64.3%	37	100.0%	66	52.8%
カフェ未設置	24	72.7%	27	72.7%	60	93.8%	111	88.8%
ラウンジ未設置	15	45.5%	18	64.3%	38	59.4%	71	56.8%
全体数(E)	33	100%	28	100%	64	100%	125	100%

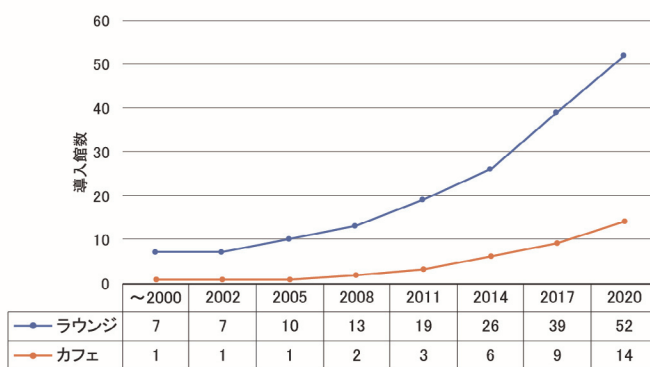


図 4 飲食可能空間(カフェ及びラウンジ)の設置時期

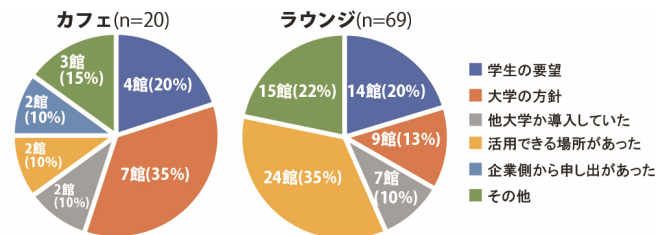


図 5 飲食可能空間の導入経緯(複数回答)

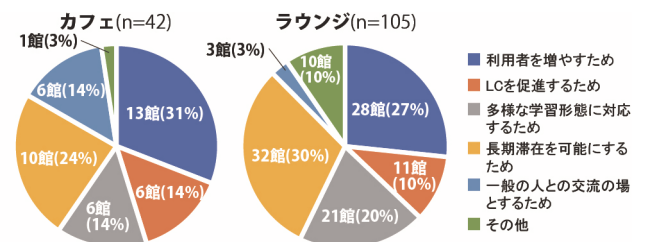


図 6 飲食可能空間の導入目的(複数回答)

立の方が比較的に少ないことが読み取れる。一方で、ラウンジに関しては、全体 125 館中 54 館(43.2%)と多く、内訳をみると国立が 18 館(54.5%)、公立が 10 館(35.7%)、私立が 26 館(40.6%)である(表 4)。

設置時期では、カフェとラウンジ共に増加傾向にあり、特にラウンジに関しては 2014 年から急増していることがわかる。カフェよりラウンジの導入を先立って行っている大学が多い(図 4)。

3.2 飲食可能空間の導入経緯と目的

導入経緯(複数回答)において、カフェは「大学の方針」が 7 館(35%)と最も多く次に「学生の要望」(4 館、20%)が多い(図 5)。ラウンジは、「活用できる場所があった」が 24 館(35%)と最も多く、次に「学生の要望」(14 館、20%)の順となっている。このことから、カフェ、ラウンジ共に「学生の要望」が主な導入のきっかけになっていると考えられる。一方で、カフェの場合は「大学の方針」が多いことから、大学による導入費用の捻出が多く左右していることや、ラウンジは費用等の側面より物理的に空きスペースが確保できる場合、「学生の要望」に応じて即時的に空間を活用していることが推測できる。

導入目的(複数回答)は、カフェ・ラウンジ共に「長期滞在を可能にするため」と「図書館の利用者を増やすため」が多い(図 6)。次に「LC を促進するため」や「多様な学習形態に対応するため」が多いことから、飲食可能空間は、図書館の利用者増加だけではなく、能動的な学習の場の一部として認識されていることがわかる。

3.3 カフェの運営機関と選定方法

カフェを有している 14 館においてその運営機関を分類し、表 5 に示す。多くの差は見られないが、チェーン店が 6 館(42.9%)と最も多く、次に地域企業 4 館(28.6%)、大学生協 2 館(14.3%)の順である。

運営機関の選定方法は、入札情報を公開・公告し希望者同士の競争により決める①一般入札方式、特定の条件により発注者側が指名した者同士で競争により決める②指名競争入札方式、任意で決定し

表 5 大学種別のカフェの運営機関

大学種別	地域の企業	チェーン店	大学生協	その他	全体
国立大学	3(33.3%)	4(44.4%)	1(11.1%)	1(11.1%)	9
公立大学	0	1(100%)	0	0	1
私立大学	1(25.0%)	1(25.0%)	1(25.0%)	1(25.0%)	4
全体	4(28.6%)	6(42.9%)	2(14.3%)	2(14.3%)	14

表 6 大学図書館のカフェ運営先と選定方法

大学種別	大学図書館名	企業名	カフェの運営先	選定方法
国立	新潟大学附属図書館	有限会社A社	地域の企業	一般競争入札(公募)
	筑波大学附属図書館	株式会社S社	チェーン店	一般競争入札(公募)
	名古屋大学附属図書館	株式会社S社	チェーン店	その他
	豊橋技術科学大学附属図書館	株式会社G社	地域の企業	一般競争入札(公募)
	和歌山大学附属図書館	株式会社DY社	チェーン店	その他
	高知大学附属図書館	—	その他	その他
	岡山大学附属図書館鹿田分館	株式会社O社	チェーン店	一般競争入札(公募)
	広島大学附属図書館	—	大学生協	随意契約
	宮崎大学附属図書館	株式会社DM社	地域の企業	一般競争入札(公募)
公立	大阪市立大学附属図書館	社会福祉法人Y	チェーン店	その他
私立	大正大学附属図書館	一般社団法人C	その他	随意契約
	近畿大学アカデミックアター	A社とC社	地域の企業	指名競争入札
	西南学院大学附属図書館	—	大学生協	総合評価方式
	同志社女子大学附属図書館京田辺	株式会社H社	チェーン店	随意契約

た相手と契約を締結する③随意契約方式。そして総合的に評価し決める④総合評価方式が挙げられた。①一般入札方式が 5 館(35.7%)と最も多く、次に③随意契約が 3 館(21.4%)である(表 6)。カフェの運営機関を決定するにおいて重要視した点では、整備予算が最も多く、次にカフェのコンセプトが挙げられた。コンセプトには、「メニュー価格を学生向けに安く設定」・「地域との連携」・「地域での学生の教育」等が重要視されている。

3.4 飲食可能空間設置における利点と欠点

大学図書館の運営側から考える飲食可能空間の設置における利点と欠点について自由記述を基に KH Coder を用いて、計量テキスト分析^{注5)}を行った。形態素解析により得られた抽出語を用いて、共起ネットワーク^{注6)}を作成し、考察を行う。

まず、飲食可能空間を設置した利点に関して、抽出語の頻度が多かった上位 3 語は、「利用(27 語)・学生(22 語)・滞在(18 語)」である(図 7)。また、共起ネットワークのサブグラフの構成から、4 つのカテゴリーに分類した。1 つ目は、「活用—自由—気軽」・「活用—多様—休憩」・「活用—場—憩い」などが結び付いており、飲食可能空間が気軽にいつでも食事や休憩等で多様に活用できる大学内の学生の憩いの場となっていることが読み取れる。2 つ目は、「学生—図書館

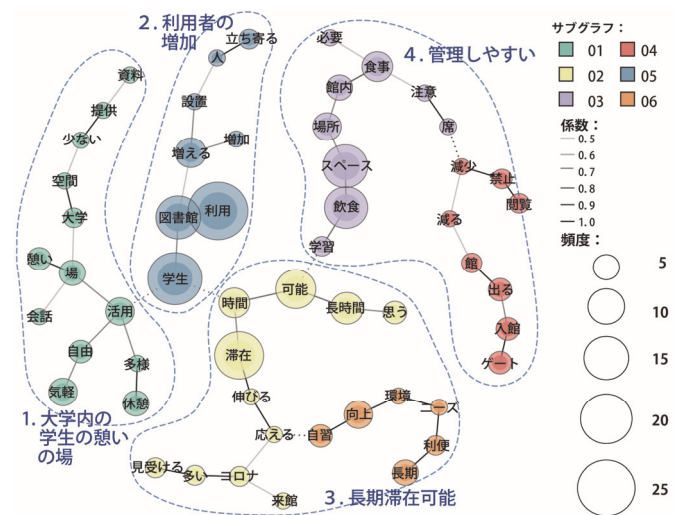


図 7 飲食可能空間の利点の共起ネットワーク図

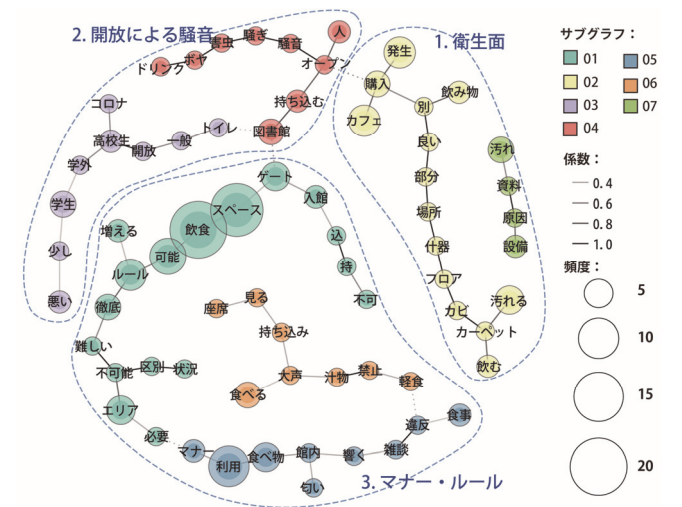


図 8 飲食可能空間の欠点の共起ネットワーク図

利用」・「学生－図書館－増える－設置－人－立ち寄る」などが結び付いており、学生の図書館利用者や立ち寄る人が増加したことを表していると判断できる。3つ目は、「時間－可能－長時間－思う」・「時間－滞在－伸びる－応える－コロナ－多い－見受ける」など、飲食可能にすることで外に出ずに長時間滞在することができたことを意味するとともに、コロナにも対応できるスペースとして使われたことも読み取れる。更に「自習－向上－環境－ニーズ－利便－長期」も結び付いており、学生の自習スペースとしてのニーズに環境が整っており、図書館の長時間利用に対して利便性や快適性が向上したと考えられる。4つ目は、「学習－飲食－スペース－場所－館内－食事」・「減少－禁止－閲覧」などが挙げられており、自由記述の内容と照らし合わせると、飲食可能空間を整備することで飲食禁止区域を明示しやすく、ルールを破る学生に注意がしやすくなる等、飲食行為について管理しやすさが表れていると判断できる。

次に欠点に関しては、3つに分類した(図8)。1つ目は、「汚れ－カーペット－飲む」・「飲む－カーペット－カビ(以下省略)」など、衛生面での問題点が挙げられている。2つ目は、「オープン－騒音－騒ぎ(以下省略)」など、開放による騒音の問題等が挙げられている。最後は、「ルール－徹底－難しい(以下省略)」・「館内－食べ物－利用－マナー(以下省略)」・「食べる－大声－汁物－禁止(以下省略)」など、飲食空間でのマナーが悪いことや、ルール徹底が困難であることが挙げられた。自由記述によると、飲食可能空間としているが、手で持ちやすい、匂いがきつくない軽食に限定している図書館も多い。また、カフェで購入したドリンクをそのまま図書館ゲート内に持ち込む等の問題も上げられ、いかにルールを運用・学生へ周知するかが、大学共通の課題であることがわかる。特に COVID-19 において

は、狭いスペースの換気等の物理的課題や、一般開放及び滞在時間の制限等の運営管理面での課題が挙げられた。

4. 飲食可能空間の配置特性

4.1 大学図書館内飲食可能空間の配置

飲食可能空間を有する大学図書館 59 館において、飲食可能空間を図書館ゲートの内と外に分類すると、図書館ゲート外は 33 館(56%)、ゲート内は 26 館(44%)である。大学種別でみると、国立・公立は、ゲート外は 6 割以上を占めていることに對し、私立は、ゲート内と外がほぼ同じ割合になっている(表7)。

4.2 ラーニングコモنزと飲食可能空間の配置関係と特徴

飲食可能空間とその他の LC を有している図書館は、47 館^(注7)あり、その配置関係を「分離型」、「隣接型」、「一体型」に分類し、それらを上記の図書館ゲートの内外と照らし合わせたものを表8に示す。「ゲート外・分離型」が 26 館(55.3%)と最も多く、次は「ゲート内・隣接型」13 館(27.7%)と、2つのタイプで8割以上を占めている。

飲食可能空間の導入目的及び学生の利用方法と配置特性との関係を見てみる。まず、導入目的では、「長期滞在を可能にするため(31 館)」・「利用者を増やすため(30 館)」・「多様な学習形態に対応するため(20 館)」が多いことは、全タイプの共通する特徴である。特に、「LC を促進するため」・「多様な学習形態に対応するため」が、「ゲート内・隣接型」に多いことは、他のタイプと異なる特徴である。

次に、学生の利用方法では、「食事(39 館)」・「休憩(39 館)」・「一人で勉強(30 館)」・「友達同士で勉強(29 館)」がほぼ同数で多いことがわかる。LC と飲食可能空間が離れている「ゲート外・分離型」は、「食事」と「休憩」が多い。一方で、「ゲート内・隣接型」が、「一人で勉強」と「友達同士で勉強」の割合が多く多様な利用行動が見られることから、このタイプが上記の LC の利用促進と多様な学習形態の対応という飲食可能空間の導入目的と合わせ、能動的な学習のために多く導入している配置タイプと考えられる。

5. おわりに

大学図書館における LC は日本の大学に能動的学習が推進され始めた 2012 年から 2014 年にかけて急増した。対象とした大学図書館では、約 7 割以上で LC が導入されており、その中で国立 9 割以上、公立と私立が 6 割以上と、国立の方の整備が進んでいる。図書館に対する LC 面積割合では、国立は 5-20% に多いことに對し、公立と私立は 10% 以内に集中している。LC の構成要素に関しては、グループ学習空間や共同学習空間等、学生同士で会話をしながら学習するスペースが多く整備されていることが共通の特徴である。飲食可能空間は、対象とした大学図書館の約半数に導入されており、LC の構成要素の中で 5 番目に多く整備されていることや他の構成要素に比べて近年増加していることが共通の特徴である。その一方、国立の方が約 7 割と公立・私立と比べ導入率が高いことが明らかとなった。

飲食可能空間のうちラウンジと比べ、カフェの設置は少ない中、カフェとラウンジの両方とも、国立の方が多く設置されている。ラウンジは「物理的空きスペース」が確保できれば「学生の要望」に応じて即時的に設置する傾向がある反面、カフェは「大学の方針」に大きく左右されていることがわかった。飲食可能空間の導入目的では、図書館の利用者増加と利用者の長期滞在が多い一方、LC の利

表7 大学図書館と飲食可能空間の配置関係

大学種別	国立大学		公立大学		私立大学		全体	
	館数(A)	A/E(%)	館数(B)	B/E(%)	館数(C)	B/E(%)	館数(D)	D/E(%)
図書館ゲート外	14	63.6%	6	60%	13	48.1%	33	55.9%
図書館ゲート内	8	36.4%	4	40%	14	51.9%	26	44.1%
全体 (E)	22	100%	10	100%	27	100%	59	100%

表8 飲食可能空間の配置特性と導入目的及び利用方法との関係

配置関係 (LC と飲食可能空間)	分離型		隣接型		一体型		合計				
	ゲート外	ゲート内	ゲート外	ゲート内	ゲート内	ゲート内					
模式図											
館数	26	55.3%	4	8.5%	2	4.3%	13	27.7%	2	4.3%	47
利用者を増やすため	17	29.3%	4	28.6%	1	25.0%	7	25.9%	0	0.0%	30
LC を促進するため	7	12.1%	2	14.3%	0	0.0%	4	14.8%	1	20.0%	14
多様な学習形態に対応するため	9	15.5%	4	28.6%	0	0.0%	5	18.5%	2	40.0%	20
長期滞在を可能にするため	16	27.6%	4	28.6%	2	50.0%	7	25.9%	2	40.0%	31
一般の人との交流の場とするため	4	6.9%	0	0.0%	1	25.0%	2	7.4%	0	0.0%	7
その他	5	8.6%	0	0.0%	0	0.0%	2	7.4%	0	0.0%	7
合計(複数回答)	58	100%	14	100%	4	100%	27	100%	5	100%	109
学生の利用方法											
食事	23	29.5%	3	30.0%	2	50.0%	10	23.8%	1	12.5%	39
一人で勉強	15	19.2%	2	20.0%	0	0.0%	11	26.2%	2	25.0%	30
友達同士で勉強	14	17.9%	2	20.0%	0	0.0%	11	26.2%	2	25.0%	29
休憩	23	29.5%	2	20.0%	2	50.0%	10	23.8%	2	25.0%	39
その他	3	3.8%	1	10.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	12.5%	5
合計(複数回答)	78	100%	10	100%	4	100%	42	100%	8	100%	142

用促進や多様な学習形態への対応も少なくないことから、飲食可能空間を能動的な学習のために必要な機能と認識している大学が多いことが明らかとなった。カフェの運営機関では、公立・私立では特徴が見られないが、国立ではチェーン店と地域の企業が多い。また、整備の予算規模と、メニューの価格及び地域との連携等の「カフェのコンセプト」がカフェの運営先の決定する上で重要視されている。

自由記述の計量テキスト分析では、飲食可能空間の設置により、図書館が学生の憩いの場になっていることや利用者が増加したこと、長期滞在が可能になったことが利点として挙げられた。また、飲食禁止区域を明示しやすくなり、飲食行為について管理しやすくなっていることが分かった。一方で、衛生面の問題や騒音の問題が挙げられ、飲食可能空間の使い方に関するルールづくりが大学共通の課題であることが示された。特にCOVID-19において、換気等の狭いスペースの物理的問題や一般開放及び長期滞在の制限問題も課題として挙げられている。

LCと飲食可能空間の配置関係では、国・公立は図書館ゲート外に飲食可能空間を配置することが多いことに對し、私立ではゲート内外がほぼ同じ割合で配置している。学生の利用方法は、LCと飲食可能空間の配置関係により異なっており、「ゲート外・分離型」は、食事と休憩、「ゲート内・隣接型」は、一人又は友達同士で勉強の割合が多いことが明らかとなった。即ち、LCと飲食可能空間を隣接する配置型が、学生の学習空間として多く使われていることが分かった。今後の飲食可能空間の整備を検討する際には、学生がどのように利用してほしいか等の利用方針を考慮したうえでLCとの配置関係を考える必要がある。飲食可能空間を整備することは、大学図書館に気軽に立ち寄る学生が増加し、リフレッシュの場となることで長時間滞在を促し、能動的学習空間の一つとして可能性がある一方、運営管理面でのルールづくり等に関しては、LCとの配置関係等を踏まえながら考慮すべき課題である。

注釈

注 1)インフォメーションcommonsとは、PCに関する人的サポートのことで、1990年代のインターネットの普及に伴い、大学図書館内にPC群が整備されたことで提供された。

注 2)The世界の大学ランキング日本版は、「Times Higher Education (THE)」が発表する世界の大学ランキングの中、日本の大学のみ対象としたランキングである。日本版では、教育環境や学生の学びの質、成長性に注目しながら、「教育リソース」「教育充実度」「教育成果」「国際性」の4分野16項目を指標とし、ランキングを作成していることから、そのランキングに属した大学図書館のLCを調査することは、教育力の向上を目指している大学を対象とする側面から妥当と判断した。

注 3)参考文献 11)で示すLCの基本構成の例示を参考に分類を行った。

LCの構成要素	分類・定義
共同学習	共同学習、アクティブラーニングを可能にする空間
PCスペース	PCを使って作業する、あるいはPCを使って議論しながら作業する空間
グループ学習	ゼミなど特定の目的を持ったグループが閉じて共同学習できる空間
プレゼンテーション	プレゼンテーションを投影して学習したり、プレゼンテーションの練習等を行う空間
人的サポート	LCの利用者に対する人的サポートの空間ないしデスク
イベントスペース	サイエンスカフェやサークル等自主的なイベントを行う空間
展示スペース	学習会や発表会、ポスターセッション等の展示会を行う空間
リラクゼーションスペース	授業外の自学自修による長期滞在を可能にするくつろぎの空間
AV(視聴覚空間)	映像などの上映に適した設備のある部屋又は空間
カフェ・ラウンジ	同士の目的を可能にする飲食が可能な空間、 カフェ: 飲食を提供する設備・部屋があり、飲食可能な空間 ラウンジ: 各自持参するものを持ち込んで飲食可能な空間

注 4)LCを設置している大学図書館のうち、水筒やペットボトル等のふた付き

の容器に入った飲料のみ許可している図書館は約9割以上(回答した図書館88館中82館)である。本研究では、水筒やペットボトル等のふた付きの容器に入った飲料を許可している空間は、「飲食可能空間」には含まないものとしている。

注 5)コンピュータプログラムによって、形態素解析(意味のある言葉を最小単位に分けて、品詞を判別する解析)を行い、単語の頻出頻度や単語間結びつきを統計的に分析する。

注 6)共起関係(出現パターン)を線で表したネットワーク図であり、円の大きさは出現回数、線の太さは、共起関係の強さを表している。

注 7)飲食可能空間とその他のLCを有している図書館では、「ゲート外・一体型」の1館を加え、計48館あったが、導入目的及び学生の利用方法についての回答がなかったことと、紙面の関係上のスペースを考慮し表8から除外した。表8の類型における集計は、47館を母数に行っている。

参考文献

- 初等中等教育局教育課程課：平成29・30・31年改訂学習指導要領の趣旨・内容を分かりやすく紹介，文部科学省（オンライン），2017.3，入手先<http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1383986.htm>，(参照2022-01-18)
- 中央教育審議会：新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて：生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ(答申)，文部科学省(オンライン)，2012.8，入手先<https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm>，(参照2022-01-18)
- 高島豊：ドイツの大学図書館の見学と調査：「学びの場」としての図書館の役割に着目して，2014年度私立大学図書館協会海外認定研修報告書，私立大学図書館協会，2014（オンライン），入手先<https://www.jaspuil.org/ind/asset/docs/nintei_report2014_1.pdf>（参照2022-01-18）
- 濱田祐次：附属図書館セミナー「大学図書館の学習空間と学修支援—世界・日本・信州の事例から—」開催報告，信州大学附属図書館研究，7巻，pp.225-230，2018.1
- Nakai, T. and Jiang, Y. : USER'S LIBRARY IMAGE AND LEARNING ENVIRONMENT IN ACADEMIC LIBRARIES -A study on the planning and design for academic library as a "place"(Part 1), Journal of Architecture and Planning, Vol.79, No.705, pp.2347-2356, 2014.11
中井孝幸，蔣逸凡：大学図書館における学習環境と利用者の図書館像—「場」としての大学図書館の施設計画に関する研究(その1)—，日本建築学会計画系論文集，第79巻，第705号，pp.2347-2356, 2014.11
- Kusukawa, M., Nakai, T. and Oyama, S. : HIERARCHICAL STRUCTURE OF THE LEARNING SPACE ACCORDING TO USER'S BEHAVIORS AND THE ATMOSPHERE AROUND THE CHOSEN SEAT IN ACADEMIC LIBRARIES -A study on hierarchy of "the place" in the academic library with learning commons Part1-, Journal of Architecture and Planning, Vol.82, No.732, pp.341-351, 2017.2
楠川充敏・中井孝幸・大山真司：大学図書館における利用行動と座席周辺環境からみた学習空間の階層構造—ラーニングcommonsのある大学図書館での「場」の階層性に関する研究その1—，日本建築学会計画系論文集，第82巻，第732号，pp.341-351, 2017.2
- Kusukawa, M., Suzuki, K. and Nakai, T. : DIFFERENTIATED USING BEHAVIORS IN THE LEARNING ENVIRONMENT ACCORDING TO THE SPATIAL CONFORMATION OF LEARNING COMMONS IN UNIVERSITY, Journal of Architecture and Planning, Vol.85, No.776, pp.2107-2117, 2020.10
楠川充敏・鈴木賢一・中井孝幸：大学におけるラーニングcommonsの設置形態別にみた学習環境の使い分け行動，日本建築学会計画系論文集，第85巻，第776号，pp.2107-2117, 2020.10
- 浅間亮太・込山敦司：空間転用により整備されたラーニングcommonsの利用実態—秋田県立大学本荘キャンパスを対象として—，日本建築学会東北支部研究報告集，計画系No.80, pp.181-186, 2017.6
- 安部信汰・夏目欣昇：国公立大学図書館におけるラーニング・commonsの現状，日本建築学会東海支部研究報告集，No.54, pp.369-372, 2016.2
- 河本啓馨・辻慶太：図書館内の飲食可否に関する実態調査，Library and information science, No.79, pp.85-107, 2018
- 国立大学図書館協会教育学習支援検討特別委員会：ラーニング・commonsの在り方に関する提言，国立大学図書館協会，2015.3（オンライン），入手先<<https://www.janul.jp/j/projects/sf1/sf1201503a.pdf>>，(参照2022-01-18)
- 木下遼香，岡松道雄，宋俊煥：大学図書館におけるラーニング・commons空間の導入特性と飲食可能空間との関係に関する研究，日本建築学会中国支部研究報告集，No.44, pp.597-600, 2021.3

[2021年10月6日原稿受理 2022年1月5日採用決定]